

▽総会 第一会議室

▽公開講演会

大隈重信と板垣退助―老年期の比較から―

日本史コース 真辺 将之氏

フランス・キュモンのミトラス教研究―『ミトラの密儀に関する文献史料と図像史料』を読む―
西洋史コース 井上 文則氏

▽懇親会 Capitano

▽部会発表要旨

〔日本史部会〕

平安時代における齋王と仏教信仰

印南 志帆

はじめに

王権の守護神に奉仕するため、天武朝から鎌倉時代末まで未婚の皇族女性が任命された齋王（齋王の常の在所に因んで伊勢神宮に奉仕する者を齋宮、賀茂大社に奉仕する者を齋院と称す）は、心身を清浄に保つべく厳しい潔斎生活を送ったが、十世紀に施行された『延喜式』は、ここで忌むべきケガレに仏教を挙げる。

本報告は、崇仏的風潮が一段と色濃くなる平安中期、仏教忌避を課された齋王が抱えた信仰上の問題と、そこから生じる「罪深い」齋王観について、その背景にある当時の神仏の位相に注目しつつ明らかにするものである。

（一）齋王仏教忌避規定の形成と展開

初めに、神事に携わる齋王に仏教忌避が課された経緯を明らかにする。大宝・養老神祇令において、神事での仏教忌避は定められていない。神仏隔離意識は一応存在したが、原則に過ぎず、称徳朝のように政権の方針によって神仏混淆策が推し進められることもあつ

た。しかし、八世紀末以降これが自覚される。神祇令には、潔斎期間の忌避事項を定めた散斎条があるが、弘仁・天長期に成立した令の注釈書『穴記』は同条にある「穢惡」に「仏法」を挙げる。

これが公的に明文化されるのは『弘仁式』以降で、式の全文が残る『延喜式』には、全五条の仏教忌避条文がある。

神仏隔離の自覚化は、伊勢神宮が称徳朝道鏡政権下での神仏混淆策を猛省し、中央に仏教排斥を主張したことを契機とする。また、仏教の日本の変容の過程で、死に関わる仏教の立場が出現したこと重要である。鎮護国家仏教を担う官僧尼はケガレを忌むため、死との接触はご法度であったが、僧尼統制の弛緩に伴い、貴人の葬送の場に僧尼が関与するようになる。こうして死穢と結びついた仏教が、神の忌むところとなる。

次に、斎宮に関する『延喜斎宮式』の仏教忌避条文二条の特徴を検証する。斎宮忌詞条には、十六語中九語もの仏教関連忌詞が示されている。ここでは、多くが忌避すべき語を類義語に言い換える一方で、忌みの度合いが強い五語に関しては対義語を当てるが、仏教関連では僧に「髪長」が充てられている。密婚条では、斎宮寮官人及び斎宮実務区域での仏事を禁じる。

両条からは、斎王の仏教忌避は非常に特殊なものであったことが判明する。対官人の仏教忌避規定が、忌避すべき期間を潔斎時に限るのに対し、在任期間全てを神へ捧げることに意味のある斎宮の斎戒は恒常的に敷かれるものである。

ところで、同式には斎院に関する『延喜斎院司式』も存在するが、ここには仏教忌避条文が存在しない。しかし、実際に斎院が仏教を忌避していたことを伺わせる史料は複数ある。両斎王に関する式にかくの如き差が生じた背景には、賀茂社が神仏習合的性格を有していたこと、皇城を守護する賀茂社の社格が、皇室を守護する伊勢神宮より劣る故に斎戒の度合いが抑えられたことなどが推測される。

(二)「罪深い」斎王観の発生

仏教が信仰の基盤となった平安中期以降、日常的な仏教忌避は、斎王の苦悩となった。

当時の貴族社会には、仏事に財力を傾け数をこなすことを善根と見なす信仰態度が存在した。故に、如何に篤い信仰心を有していても、直接仏事を営むことの出来ない斎王は功德が積めないと解されたのである。

円融以後一条朝の斎院選子内親王は打開策として、僧と文を交わす、仏事に代理人を派遣する、釈經歌集を編纂する、など、規定に抵触しない間接的手段での仏道修行を行う。しかし、自身の老病等切実な状況にあった長元四年(一〇三二)九月、出家を目的にした斎院無勅許退下事件を起こしてしまう。

選子をここまでの不安に陥れた背景には、当時の神仏の位相が密接に関わる。豊かな思想性を有して後生を願い得る仏教に対し、神祇に同様の特徴は無い。従って、何より避けたいのは斎王の任に就

いたまま死亡することであった。

平安中期以降の文学作品には、齋王経験者を「罪深い」とする例が散見される。例えば、『源氏物語』（若菜下）では、六条御息所の死霊が前齋宮の娘に対し「齋宮におはしましたころほひの御罪輕むべからむ功德のことを、かならずさせたまへ」と忠告する。そして、『源氏』に出てくる前齋王の多くは、罪を償うために出家を望むのであった。実際の齋王経験者の中にも、比率として決して高くはないものの複数の出家者が存在している。

齋王経験者が負うこうした仏教的罪業は、齋王就任を拒む風潮へと繋がっていく。

おわりに

本報告では、齋王の仏教忌避が日常的なものである点で極めて特殊であったことを明らかにした。その上で、仏への信仰が基盤となり、数量主義的信仰態度を評価した平安中期、齋王が功德を積み重ねる存在として苦悩し、「罪深い」齋王觀の発生から齋王への就任を忌避する風潮が生じたことについて検証した。

今後は、こうした齋王への悪印象が、同時期に生じた齋王制度形態化と如何に関連しているのかを考察していきたい。

光明皇后による施薬院の草創とその思想

岩本 健寿

光明皇后による施薬・悲田両院の設置は、仏教に対する彼女の篤信や慈悲深さを物語るものとして名高く、後に彼女への信仰を派生させる一つの要因にもなった。しかし、両院に関する史料は極めて乏しく、結果的に、その設置理由については、光明皇后の慈悲心に関係させるかたちでしか語られることがない。そこで、本報告では、以上のように理解される傾向にある施薬院設置について、同じく光明皇后が深く関与した興福寺施薬院の史料を用いつつ、また、従来考慮されてこなかった天平二年（七三〇）という年次に着目して、検討を試みた。ただし、悲田院に言及する史料が更に少なくするため、考察対象を施薬院に限った。

光明皇后の皇后宮職下に施薬院が設置されたことは、『続日本紀』天平二年四月辛未条に確認できるものの、設置理由は記されていない。一方、『同』天平宝字元年（七五七）十二月辛亥条では興福寺施薬院への田地施入のことが記され（興福寺施薬院が六国史に記されるのは本条のみである）、願文には「福田」という語が使用されている。これ故に、従来、施薬院は、興福寺のものであれ、皇后宮職下のものであれ、光明皇后が仏教の福田思想を基にして社会的